（改譯）マラキ書（未定稿）

21. 3.
既設京市
市図書館
目丁四

第一章

一 マラキによりてイスラエルに臨めるヤアヱの言の重負。*

二 ヤアヱ言ひ給ふ『われ汝らを愛したり』
然るに汝らは言ふ『汝いかに我らを愛せしや』
ヤアヱ言ひ給ふ
『エサウはヤコブの兄弟にあらずや。
我はヤコブを愛したれども
三 エサウを憎めり。
且われ彼の山を荒地となし、
その嗣業を荒野の狐に與へたり。
四 そは、エドムは「我ら打倒されたれども
再び荒れたる處を建てん」といふによりてなり』
萬軍のヤアヱ斯く言ひたまふ
『彼らは建てん、されど我は毀たん。

*或は「ヤアヱの託宣」

人々彼らを「悪しき地方」と呼び、
「ヤアヱの永久に怒りたまふ民」と稱へん。
五 汝らの目は見、而して汝らは言はん
「ヤアヱはイスラエルの境を越えて大なりと」
六 『子はその父を敬ひ、僕はその主を畏る。
我もし父たらば我を敬ふこと何處にありや、我もし主たらば我を畏ること何處にあるや、
わが名を侮る祭司等よ』と
萬軍のヤアヱ汝らに言ひたまふ。
『然るに汝らは言ふ「我ら如何に汝の名を侮りしや」と。
七 汝ら汚れたるパンをわが壇の上に持ち來りて
「我ら如何に汝を汚せしや」といふ。
汝ら「ヤアヱの臺は賤しむべきものなり」といふによりてなり。
八 汝ら犧牲のために盲のものを持ち來るは惡にあらずや。
また跛のものと病めるものとを持ち來るは惡にあらずや。
今これを汝の司にささげよ。

かれ汝を悅ぶや、かれ汝を受けいるるや』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
九 『請ふ、汝ら今神に我らを惠みたまはんことを求めよ、
これは汝らの手になれり、
かれ汝らを受けいれんや』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
十 『汝らいたづらにわが壇の上に燃やすことなからんために
汝らの中の一人、扉を閉づる者あらまほし、われ汝らを悅ばず、
また汝らの手より獻物を受納れじ』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
十一 『そは日の出づるところより日の沒るところまで
わが名は國々の中に大なるべければなり。
また何處にても香と潔き獻物とわが名に獻げられん。
そはわが名は國々の中に大なればなり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。

十二『然るに汝らは「主の臺は汚れ、
その果、その食物さへも卑しむべきものなり」と
言ふによりてこれを瀆しつつあるなり。
十三 また汝らは「視よ如何に煩はしきことよ」といひて
これをさげすむ』と萬軍のヤアヱ言ひ給ふ。
『また汝らは奪ひ取りしもの、跛のもの、病めるものを携へ來る。
汝らこれを献物として携へ來れば
我これを汝らの手より受くべけんや』と
ヤアヱ言ひたまふ。
十四『その群に牡あるに
誓をたてて疵あるものを主に献ぐる詐欺漢は詛はるべし。
そは我は大なる王にして
わが名は國々の中に畏れらるべければなり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。

第二章

一『祭司等よ、今この命令汝らに與へらる。
二 汝等もし聽き從はず、また心にとめず
わが名に榮光を歸せずば
われ汝らの上に詛を來らせ、
汝らの祝福を詛はん。
然り、われこれを詛へり。そは汝ら心にとめざりし故なり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
三『視よ、われ汝らのために種を戒めん。
またわれ汝らの面の上に糞すなはち犧牲の糞を撒き散さん。
われ汝らをこれと共に携へ去らん。
四 汝ら知るべし、わがこの命令を汝らに下したるは
わが契約レビと共にあらんためなるを』と萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
五『わが彼と結びし契約は
生命と平安にして
われこれを彼に與へたり、

また畏懼にして
かれ我を畏れ、かつわが名の前にをののけり。
六 眞理の律法彼の口にあり、
不義その唇に見出されざりき。
彼は平和と公義とをもて我と偕に歩み、
多くの人々を不義よりたち帰らしめたりき。
七『それ祭司の唇は知識を保つべく、
かれの口より律法を求むべし。
そは彼は萬軍のヤアヱの使者なればなり。
八 然るに汝らは道を離れ、
多くの人々を律法に躓かせ、
レビの契約を破りたり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
九『また汝らわが道を守らず、
律法をおこなふにあたりて人に偏りしを以て我も汝らを見ての民の前に輕しめ、賤しめたり』

十 我らは皆ひとりの父をもつにあらずや、
我らを造りしはひとりの神にあらずや、
いかなれば我ら先祖等の契約を潰して
おのゝ己の兄弟を欺くや。
十一* ユダは僞りを行へり、
イスラエルとエルサレムの中に憎むべきこと行はれたり、
そはユダはヤアヱの愛し給ふ聖(所)を潰して他神の女を娶りたればなり。
十二 ヤアヱこれを行ふ人をば呼ぶものをも、答ふる者をも
ヤコブの幕屋より断ち給はんことを。
萬軍のヤアヱに献物を持ち來るものも亦然り。
十三 而して汝らは再びこれを爲さん、
すなはち涙と啼泣と歎息とをもてヤアヱの壇を蔽はん。
そは彼はもはや献物を顧ず、
汝らの手よりこれを悦び受け給はざるべければなり。
十四 然るに汝らは「何故ぞや」と言ふ。

*或は「ユダは信義に背けり」と訳す

そはヤア卫汝と汝の若き時の妻との間の
證人となり給ひたればなり。
彼は汝の伴侶、汝の契約の妻なるに
汝かれを欺きたり。
十五 *彼はただ一人を造り給ひしにあらずや、
されど彼には靈の餘ありき。
何故一人のみ造り給ひしや、
神を敬ふ裔を求め給ひし故なりき、
されば汝らみづから謹みて
その若き時の妻を欺くことなかれ。
十六 イスラエルの神ヤア卫言ひたまふ
『我は離緣を憎み
また暴虐をもてその衣を蔽ふものを憎む。
されば汝等みづから謹みて欺くことなかれ』と
萬軍のヤア卫言ひたまふ。

*この十五節の前半は原文が明確ならざるため、種々の讀方あれども大体現行訳を保存することとせり

十七 汝らは言をもてヤア卫を疲らせたり。
然るに汝らは言ふ「我ら如何に彼を疲らせしや」と。
これ汝らが「すべて惡をなすものはヤア卫の目に善く、
彼はそれを悦び給ふ」と言ひ、
或は「審判の神は何處にあるや」といへばなり。

第三章

一 『視よ、我わが使者を遣さん、
彼わが前に道を備へん。
汝らが求むるところの主、
汝らが悦ぶところの契約の使者、
たちまちその宮に來らん。
視よ、かれ來らん』と萬軍のヤア卫言ひ給ふ。
二 『その來る日には誰か堪へ得んや、
その顯るる時には誰か立ち得んや。
そは彼は金を鍊る者の火の如く
漂布者の灰汁の如くなればなり。

三 彼は銀を鍊り鍛ふる者の如くに坐せん。
而して彼はレビの子等を潔めん、
彼は金銀の如く彼らを淨めん。
かくて彼らは義をもてヤアヱに献物をささぐる者とならん。
四 その時ユダとエルサレムの献物は
古の日の如く、また先の年の如くヤアヱに悅ばれん。
五『我は審判のために汝らに近づき、
魔術師と姦淫を行ふ者と
偽の誓をなす者と
傭人の賃銀を奪ふ者と
寡婦と孤兒を虐ぐる者と
異邦人を押しやり、我を畏れざる者とにむかひて
敏速に證をなさん』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
六『そはわれヤアヱは變ることなければなり。

故にヤコブの子等よ、汝らは滅ぼされざるべし。
七 汝らその先祖等の日より
わが律令を離れてこれを守らざりき。
汝ら我にかへれ、われ汝らに歸らん』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
『然るに汝らは言ふ「我ら如何に歸るべきや」と。
八 人、神を侵さんや、
されど汝らは我を侵す者なり。
汝らは言ふ「我ら如何に汝を侵せしや」と、
十分の一および捧げ物に於てなり。
九 汝らは呪詛をもて詛はる、
然るにこの凡ての國人よ、汝らはなほ我を侵すものなり。
十 わが家に食物あらしめんために
汝ら全き什一を倉庫に携へ來れ、
これをもて我を試み、

わが汝らのために天の窓を開きて
殘りなきまでに恩惠を汝らに注ぐや否やを見るべし』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
十二『我また食ひ盡すものを汝らのために抑へて地の産を滅ぼさざらしめん。
また畑にある葡萄の樹をして實を結ばざることなからしめん』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
十三『またもろ〳〵の國人は汝らを幸福なる者ととなへん。
そは汝らは樂しき地となるべければなり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。
十三ヤアヱ言ひたまふ『汝らは言葉を强くして我に逆へり。
然るに汝らは言ふ「我ら如何に汝に逆ひて言ひしや」と。
十四汝らは言へり「神に仕ふることは無益なり、我らその命令を守り、
萬軍のヤアヱの前に悲しげに歩みたりとて何の益あらんや。
十五今我らは高ぶる者を幸福なりと思ふ。
げに惡を行ふ者は建てられ、
神を試むる者も亦免かる」と』。
十六その時ヤアヱを畏るるもの互に相語りぬ。
ヤアヱ耳を傾けて聽きたまへり。
而して覺えの書はヤアヱを畏るる者及び御名を思ふ者のために
ヤアヱの前に書きしるされたり。
十七萬軍のヤアヱ言ひたまふ『わが爲さんとする日に於て
彼等わが寶となるべし。
また人の己に仕ふる子をあはれむが如く
われ彼らをあはれまん。
十八而して汝らは歸りて義しき者と惡しき者、神に仕ふる者と仕へざる者とを見別けん。』
以下現行譯第四章
(一)十九『そは、視よ、爐の如くもゆる日來らん。
すべて高ぶる者と惡を行ふ者とは藁となならん。
その來らんとする日彼らを燒きつくして
根も枝も殘らざらしめん』と

萬軍のヤアヱ言ひたまふ。

(二)二十『されどわが名を畏るる汝らには
義の日昇らん、その翼には癒すちからあらん。
汝らは檻より出でし犢の如く跳び廻らん。

(四)二一 また汝らは悪人を踏みつけん。
そは彼らはわが為さんとする日に於て
汝らの足裏の下にある灰の如くなるべければなり』と
萬軍のヤアヱ言ひたまふ。

(四)三『汝等わが僕モオセの律法、
すなはちわがホレブにて全イスラエルのために彼に命ぜし
律令と誡命とを憶えよ。

(四)三二 視よ、ヤアヱの大なる恐るべき日の來るまへに
われ預言者エリヤを汝らに遣さん。

(六)二四 かれ父の心を子等に帰らせ、
子等の心をその父に帰らしめん。

これ、わが來りて呪詛をもて地を撃つことなからんためなり。』

マラキ書　をはり